OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

「貨幣の職能」を讀みて

岩井茂

一

大正十五年十二月博士の「貨幣の生成」が甫めて上梓され、以つて吾が沈滯せる貨幣論界は茲に新たなる息吹をふきかけられた如くに思はれた。そして翌昭和二年十一月には「貨席の本質」が發刊され、又昨年九月には「貨幣の職能」の刊行を見るに至つた。この三著は後に現はれんとする「貨幣の價値」と共に博士、貨幣論の一大體系たる「貨幣の理論」を構成するものである。

既刊の三著は——未刊の一著も恐らくさうであらうと確信するものであるが——推敲斧鑿の痕著しいものがあり、極めてよく精錬されたる思想が琢磨せられたる文字の中に盛られてあるのを見る。故に此の書は一讀にして捨て去らるべきものではなく再讀三讀して初めてよく理解され得るものである。而して余自身も或ものは再讀し或ものは三讀しその都度新たに何等かのものを教へられてゐる。

二

今茲に余は既刊三書中最近の發刊にかゝる「貨幣の職能」につき讀後の所感を述べてみたいと思ふ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

「貨幣の職能」は時間的には「貨幣の本質」に後れて上梓されたけれども、體系上は之に先き立ち、博士の體系「貨幣の理論」の第二部を構成するものである。余が嘗て「貨幣の本質」を讀みたるとき、余はその中に既に業に貨幣の職能に關する多くの所説の述べられてあるのを見て、時間上後れて發表される「貨幣の職能」の内容に就き又その書物の量に就き輕い不安と又好奇の心とを以つて待望んでゐた。然るにいよ〳〵之が發行せられ、現實の形をとつて現はれたとき、余の不安に感じたる事が或意味に於いて適中し、又余の全然豫期しなかつた方面に於いて博士の所懐を聞くことを得て非常に愉快に感じた。

行論の便宜上今「貨幣の職能」全篇の内容を示せば左の如きものである。

緒　言

第一節　經濟の基礎概念

第二節　經濟社會に於ける貨幣の地位

第三節　貨幣職能の分析

第四節　貨幣に對する欲望の發達

第五節　貨幣に對する欲望の限界

然るにこの中傳統上貨幣職能論として本來の存在權を有するのは第三節のみである、そして尚準備的或は補充的の所論として第二節が之に加り得る。此の二節を合計して紙數約六十頁ある。即ち全體約百六十頁中六十頁が

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

その本來的の部分にして他は然らざる部分に屬する如くに思はれる。そして若し之のみならば「貨幣の生成」「貨幣の本質」と相匹適した一書としての體裁を保つことは恐らく困難であらう。この點に余の不安があつたのである然るに此の不安は、かの内容豊かなる第一節經濟の基礎概念(四十頁)を加へられたことによつて、その大半を拭はれた。そしてこの一節の加へられた事は一面博士の不斷なる學的精進の一端を物語るものであり、又他面博士の貨幣理論にその礎石を供するものとして、誠に意味深く思ふ。尚一貨幣理論は一般的經濟理論上の立場を確立したる後に於いて初めて完璧を得るものであるが故に、博士の體系上「生成」に續く本書の卷首に於いて之に筆を染められたことは全くその宜しきを得たものといはなければならぬ。

斯くの如く第一節の重要性は之を肯定し得るが、第四節、第五節は本來は「貨幣の價値」に於いて述べられるものか、又は「貨幣の理論」全體の補論として附加さるべき性質のものではなからうか。博士が之を茲に收められたに就いては勿論相當の理由あることゝは思ふが、その中に各分冊の量を大凡均齊にしたいといふ Symmetrism 乃至は廣く解して Conventionalism がその動機の一部を占めてはゐないであらうか。斯くの如き疑問を有する余は本稿に於いて最初の三節のみを取扱ひたいと思ふ。此點著書に對するの禮を缺くこと甚しいが豫め裕恕を乞ひたい。

三

扨て高垣博士は經濟を如何に觀ぜられるやといふに、それは「人間の有する生存目的を達するためになす外界

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

客體の計慮的なる取得處理である」とせられるやうである。即ち博士自身の著書に就いて見るに、次の様な文字が見出される。

「自然は人間を二つの王座の羈絆に繋いでおる。自己保存の本能と種族維持の本能と之れにして、人類が既に生存し、現に生存せる事實は雄辯にこのことを證明する。」（「職能」三一頁）「而して生存の目的のためには、外界客體の計慮的なる取得處理を必要とする。經濟的なるものゝ表徴は即ち茲にある、この目的に關聯せしめたる斯かる計慮的行動を經濟行動と云ひ、人間生活の之を內容とする部分を經濟生活と呼び、經濟者相互の關係に於て經濟行動をなし、經濟生活を營むための社會的機構を經濟組織と云ふ。」（「職能」三二頁）

而して經濟と技術とは如何なる點に於いて異同ありやといふに共に外界客對に對する、又は之に關する行動であることは同じいが、併し經濟は一つの目的に關連し、從つて價値意識的となるが、技術は單に經濟實現の手段に過ぎないといふ點に於いて異る。（「職能」三三頁參照）而して茲に目的といひ手段といひ共に相關概念ではあるが經濟の目的とする所謂生存目的は原始的基礎的なる目的であるが、技術が一の手段である場合の目的となるものは生存目的よりも次順位のものであるといふのである。（「職能」一八頁以下參照）それ故に經濟と技術とは別個のものであり、又その區別の要點はこゝにあると考へられてゐるやうである。

尙價値に就いては次の語が見出される、曰く「價値は客體の自然的性質にあらずして、總て一つの目的を豫想し、之に關聯せしめての主體に於ける意義の認識なりと解せらるべきが故に、以上の目的（生存目的）に關聯せし

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

めて外界客體の有する重要さを判斷せらるゝとき、茲に經濟價値の現象を生ずる」と。(「職能」三三頁) 而して此の意味の經濟價値は更に特殊的經濟價値と一般的經濟價値とに分たれ、前者は財の保持するところ、後者は貨幣の保持するところのものとなさるゝのである。(「職能」五九頁參照)

次に博士は經濟は元來社會的なりや個人的なりやに就いて言及して居られる。惟ふに現今の一般的趨向としては個人主義的經濟學より社會的、普遍的經濟學に向はんとしつゝあるのに、博士は此の際保守的の態度をもつて個人主義的傾向に與みせられる。

曰く「經濟そのものゝ本質に於て、社會的ならざるべからざるの理なく、必ずしも社會に據らざれば存立の意義なしと觀るべきではない」と。(「職能」三六—七頁) 更にリーフマンの言を引用して曰く「經濟理論に對しては如何なる綜合經濟も、大なる社會的全體も存しない。唯だ個人經濟とその關係が存するのみ」と。(三七頁) 又曰く「個人の心の外にある社會の心はなく、個人の意識を超えてその外に立つ社會の意識の存することを觀るを得ない。汎ゆる社會的なるものは個人を通じて觀らるゝ其の相互作用的なる一面に外ならぬ。故に經濟現象を社會的立場に於て理解せんとする試みも、之を與へられたる社會的なる存在そのまゝに於て觀ず、一旦その保持者にまで還元するとき、社會的關係構成の經過を瞭かならしむると共に、社會的現象の內部的性質をも理解せしむるものと信ぜざるを得ぬ」と。(「職能」三八—九頁) 即ち是に由つて觀るに博士は全然(Universalismus の立場を離れてAtomismus の立場に依らるゝものである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

尙此の外博士は經濟學方法論に筆を染めて居らるゝが、こゝには只博士がヴキーザアの所說に贊し、又マックス・ヴェーバアのIdealtypus概念に思を寄せらるゝことを附記するに止める。

四

以上に於いて余は高垣博士が一般經濟理論の中に於いて採つて以て己が立場となさるゝものに就いて顧みた。そしてその思想がすべて熟慮硏覈の末に發表せられたるものにして、みだりに攻擊の的とすることのできないものであることを覺える。併し余は玆に余自身の蒙を啓らかるの機會を作らんがために、一二感じたる點を述べてみたいと思ふ。

先づ博士は社會現象も皆個人現象又は個人現象の關係に過ぎないものであつて、いはゞ固有の社會現象といふ如きものは存しないと考へられるやうである。この社會現象を個人現象と區別して、前者に概念上、獨立の存在を與ふるや否やといふことが、かのUniversalismusとIndividualismus乃至Atomismusとの立場の別れるところであるが、併し吾等が靜かに考へてみるに、所謂社會現象は之を全部個人現象に分解し去ることのできないものではなからうか。博士もリーフマンの言を引用して「個人經濟とその關係が存するのみ」といはるゝが、既にその關係は個人經濟又は個人現象とは別個のものではなからうか。そして此の關係は孤立的個人の存在のみにては決して現はるゝことなき性質のものであらう。故にこの「關係」といふ如き現象は個人現象とはその意味の平面を異にした

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

概念上並列させることのできないものと考へなければならぬ。余がかく云へば博士は難じて、そは個人を孤立的個人として狭く考へすぎるの過ちを犯してゐるものであつて團體生活内部の個人と考へればその批難は當らないであらうといはれるかも知れぬ。併し若し然りとせば余は更に云ひたい。團體生活内部の個人を云爲するとせばそは既に全體としての社會又は社會現象を豫想さるゝものではなからうかと。換言すればその個人は孤立的個人、モナド的な個人ではなく、いはゞ社會的個人、相互作用的個人でなければならぬ。之だけでは未だ充分言葉を盡したものとはいひ得ず、不充分不精確ではあらうがとに角、社會現象は社會現象として全部個人現象に分解し盡され得ない部分を有し、高垣博士の説を以つてしては此の社會現象本來の現象が掬ひ上げ得られないといふ憾みを止むるものではなからうか。上に掲げたる如く博士自身「經濟現象を社會的立場に於て理解せんとする試みも之を與へられたる社會的なる存在そのまゝに於て觀ず、一旦その保持者にまで還元するとき、社會的關係構成の經過を瞭かならしむ云々」といはるゝが、併しそれでは社會的關係そのものゝ構造が未だ理解せられないであらう。そして私見を以つてすれば、社會と個人との關係は正に Ganz und Teil の關係に於いて觀るとき初めて良く理解さるゝものゝ如くに思はれる。そしてこの際の個人は、最早孤立的個人ではなく、相互作用的個人又は社會的個人と考へらるべきものと思ふ。換言せば社會關係又は社會現象を承認する限り——高垣博士も究極に於いて之を個人現象に分解すべきものとせられるが一應は之を許さるゝやうである——その際取扱はるゝ個人概念は個人の Wesensbegriff には非ずしてその Funktionsbegriff でなければならぬと思ふ。(Vgl. O. Spann: Zur Logik der

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Sozia.wissenschaftlichen Begriffsbildung, Tubingen. 1905. S. 166ff.　拙譯、商工經濟研究二卷一號九七頁以下參照）

五

以上に於いて余は「貨幣の職能」中第一節につき考究したるが故に次に第二節以下について顧みたいと思ふ。

高垣博士に從へば貨幣職能の研究には「凡そ二個の順路」があり得る。「一は經濟社會を全體として眺めつゝその間に於ける貨幣の地位を把捉するものにして、他は貨幣の職能と考へらるゝ總ての活動の態樣をとり個別的に研究して、分觀より集觀に至り之が統一觀念を求むるものである。」この中第一の方途による研究をば「職能」の第二節に於いて、又第二の方途による研究をばその第三節に於いて論ぜられる。今その前者より述べよう。

併し此の問題は貨幣起原の問題と關連するが故に、豫め少しく之に關說しなければならぬ。博士は曰く「貨幣の起原に關しては、如何なる流通過程の裡より貨幣は成立したるかの問題と、如何なる貨物が貨幣となれるかの問題とを、嚴密に區別して考へねばならぬ」（「生成」五頁）となし、その前者に對しては「直接的に行はるゝ流通の困難……を容易にするための手段として自然に貨幣は現はれ來つたものである」と答へ、又後者については「特殊的經濟價値を保持する財が、一般的經濟價値を保持する中間體に代位せられる」に到つたものであるとなされる。（「職能五二——三頁參照）尙之に附加して曰く、「代位者となるものは初め自ら價値ある流通客體の內一般的に尊重せられて最も流通の容易なるものなりしが、社會的慣習、信認の確立等に基き、實體を離れし形式のみ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

によりて可能となるに至つた。然ればそは如何なる特殊的價値を保持せずとするも如何なる特殊的價値にも、轉換せらるべき可能性を有し、從つてその意味に於て一般的經濟價値を保持する」と。(「職能」五三頁)

之一面貨幣の生成を物語ると同時に、他面經濟社會に於ける貨幣の地位を云ひ現はすものである。換言すれば貨幣が經濟社會に於いて占むる地位は他の如何なる特殊的價値を保持する經濟財とも轉換自在なる一般的經濟價値を保持する點にあるとなさるゝのである。

斯く考へ來ると貨幣はあらゆる經濟財の流通關係の中心に立つものとなる。そこでかゝる貨幣の地位はヘルフエリツヒのいみじくもいひなしたやうに、恰かも流通場裡に於ける商人の作用に擬らへることができる。(「職能」五六頁參照) そして「商人が流通の人的關係に於ける結合點をなせるに對して、貨幣は物的關係に於ける結合點をなす」("Das personale Zwischenglied des Verkehrs ist der Handler, das Sachliche Zwischenglied ist das Geld." Helfferich : das Geld. 1923. S. 262.)といふ主張がなされ得る。

次に吾人は「貨幣も亦財なり」といふ博士の特殊なる主張を看過することはできぬ。

曰く「若し欲望の對象となり、流通の客體となるものは總て財なりとなすべくんば、貨幣もその內に包含せられざるを得ぬ。然しながら貨幣の經濟者に對する關係は……その中最も間接的なる」ものである。即ち「貨幣は一般的なる經濟價値を保持して汎ゆる財に轉換せられつゝ、際限なき軌道を走つて常に流通し、最後の到達點を有せぬ。」「貨幣は最高の意義に於ける商品なりとせらるゝことあるは、斯く轉々流通して止まるところなき事實

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

を指せるに外ならぬ。」（「職能」五七―五八頁）

「然れば貨幣は特殊的經濟價値を有する如何なる財にも轉換せらるゝ可能性を有ち、その意味に於て一般的なる經濟價値の保持者にして、從つて價値判斷の對象となる。予が貨幣に價値ありとの論結に達するはこの故にして、貨幣に價値なしとするの說は、たゞ之が一般的經濟財と同樣の意味に於て評價の對象たらざるを意味するに外ならざるべく、如何なる意味に於ても、然りと云ふことを得ない」と。（「職能」五九頁）

要言すれば博士にあつては貨幣は一種の財にして、又或意味に於いて價値判斷の對象となるのである。かく考へることは貨幣を以つて抽象的なるものと見ず具體的なるものと觀ずることにより初めて可能にして、その信仰告白も博士の言葉の中に見出される。曰く「貨幣を以て具體的存在と觀ることは予も亦捨て得ざるところ云々」と。（「職能」五九頁）

六

以上のところに於いて余は「貨幣の職能」第二節の主張の主要なるものを大體に於いて紹介し得たかと信ずるが故に、茲に一の疑點を披瀝して教を乞ひたいと思ふ。

博士に從へば特殊的經濟價値と一般的經濟價値とが區別せられ、前者は財が、後者は貨幣が之を保持する。然るに此の際、特殊的經濟價値及一般的經濟價値、從つて爾餘の財と貨幣たる財との論理的關係如何といふことが

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

余には明瞭に悟り得ない。特殊的經濟價値と一般的經濟價値とを對比するとき、吾人はその表現に即して後者を一般者Genus, Gattung前者を特殊者Spezies, Artと考へるか、又はその內容に即して兩者を別種のものと見なければならぬ。その前の見方に就いては、本來特殊的、一般的といふ表現そのものより來る考方なるが故に詳論を俟だすして容易に理解し得る。その後の見方に就いては稍說明を要するかと思ふ。

抑々高垣博士の解せられる經濟價値の如何なるものなりやといふことは或は「貨幣の價値」に於いて詳細に知り得るのであらうが、今迄說かれるところに於いては次の如く云はれる。「價値は客體の自然的なる性質にあらずして總て一つの目的を豫想し、之に關聯せしめての主體に於ける意義の認識なりと解せらるべきが故に以上の目的(生存目的)に、關聯せしめて外界客體の有する重要さを判斷せらるゝとき、茲に經濟價値の現象を生ずる」と。(「職能」三三頁) 略言すれば生存目的に向つて有する外界客體の重要性、之が經濟價値であると考へられる。勿この論重要性は客體固有の性質ではなくして、人の主觀的なる判斷の結果である。然かも、その判斷(正しく云へば評價Werten)の目標となるものは「生存」といふことである。或客體が此の目標に向つて重大なる意義を有すれば、その客體は經濟價値大なりとなされ、又僅少なる意義を有するに止どまるときは、その客體は經濟價値小なりと評價されるのである。之が博士に於いて本來の意味の經濟價値である。而して若し余の解釋にして誤なしとすれば、博士が特殊的經濟價値と稱せらるゝものが之に相當する。そして博士の所謂一般的經濟價値はこの範疇には屬し得ないものと思惟する。蓋し上にも述べたるが如く、博士は「手段と目的との關係は意識的、相對的にし

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

て、如何なる目的も之を目的系列の次順位のものに繋らしめて、その手段なりと解することを得る」（「職能」一九頁）と考へられるが、是に基いて考ふれば、人が外界客體を計慮的に取得處理する際の目的となる生存目的と、その取得處理、換言すればその流通を容易ならしむるための手段として貨幣を使用するときのその目的とは均しく目的とはいへ、兩者はその目的系列の中に於いて占める地位を異にしてゐる。そして博士に從つて生存目的—對—外界客體の關係を經濟的として特徵附けたとすれば、流通助成目的—對—貨幣の關係は本來經濟的なりとして特徵附け得ないものでなければならぬ。依つて內容的に見て博士の所謂特殊的經濟價値と一般的經濟價値とは意味の平面を異にしたものといはねばならぬ。然るに博士がこの後者に就いてたとへ「一般的」といふ形容詞を附せらるゝにもせよ、一の經濟價値となさるゝ所以のもの如何、余の不敏未だ之を解することを得ない。

尙之に附隨して云ひたい。博士は一般的經濟財と同樣の意味に非ずとするも、兎に角貨幣に價値ありとなさるるが、之は云ふまでもないとである。只要は財の有する價値と、貨幣の有する價値と均しく價値といふとも、その意味が異なるといふことである。換言すれば財を評價する際の目標と貨幣を評價する際の目標と異なるといふことである。更に言を更めて云へば一般經濟財が經濟價値を保有すと云ひなすその立場に於いて、直ちに貨幣が評價の對象となり、又或種の經濟價値を有すとは云ひ得ないのではないかといふことである。然るに敢えて之を主張せんとすれば立場の飛躍を來たすことにならざるかを懼れる。

左右田博士が財を目的と觀、貨幣をあくまで手段と考へられ、從つて貨幣に價値を認められざるが如き、又は

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

エルスタアが財に對する人の心理的過程と貨幣に對する人の心理的過程の區別より論じて貨幣に價値を否定するが如き、高垣博士にとりては或は不滿ならんも然かも論理上はその立場に忠實なるものといはねばならぬ。

此の點に關しては次の諸書を參照せられたい。

左右田喜一郎著川村豊郎譯　貨幣と價値　五八頁、左右田喜一郎著　改刷經濟哲學の諸問題　三四八頁等

Elster: Die Seele des Geldes. 2. Aufl. 1923. S. 373ff.　拙稿　エルスタアの價値理論　商學研究八卷二號所載

七

「貨幣の職能」の第二節は經濟社會に於ける貨幣の作用(地位)に就いての一般的研究であつたが、その第三節は貨幣の個別的職能Einzelfunktionenの研究である。

之に關しては博士は先づヘルフェリツヒの擧ぐる五個の職能と、英米學者の示す更に一個の職能とを列擧して研究して居られる。今その各々に對する博士の意見を聞かう。

第一　一般的交換手段

此の職能は交換經濟上に於ける一の重要なる職能ではあるが未だ本質的の職能ではない、之は「貨幣の全職能を包含し之を統合するの力を有せず、我等はその根底にありて斯かる職能を靈さしむるゝ所以のものに、本質的職能を探ぐることを得る」(「職能」七七頁)とせられる。

第二　一般的支拂手段

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

貨幣論の文献中支拂概念を純法律的に規定したるもの（例へばクナップの如き）と、又之を經濟的に規定したるもの（例へばエルスタアの如き）とあることは周知の事實であるが、高垣博士は別に一家の見解を持せられるが故にこの區別に就いてはあまり細論されてはゐない。扨て然らば博士の意見とは何ぞや、曰く「從來の學說に於て交換手段たることを力說する所以は、貨幣の起源に關して自然交換の困難に職由すとなす見解に深く拘泥するが故であり、支拂手段たることを別に擧げんとするは、交換手段たることの意義に漏るゝものあり、而して其の部分の重要なることを看過せざらんとするに出づる。貨幣の本質的職能に至りては、此等總てを綜合して然かもその根底に立てるものを索めねばならぬ」（八二頁）といふことである。

第三　資本移轉媒介手段

ヘルフェリツヒにあつては此の資本移轉の媒介手段たる職能は上記の二職能と共に相補ひて貨幣の本質的職能をなす。之に對する高垣博士の所說は次の如くである。「貨幣の形式に於ける資本の重要なる地位を占むることは言ふを俟たざれども、資本の移轉は貨幣ならざる形態によりても行はるゝところにして、貨幣を以てするとき特に流通性の大なるものあるに過ぎぬ。而して發生的に考ふるも、そは上記の二職能より來れる結果にして、此等の三者を同等の關係におき、相率ひて一つの本質的職能を盡すものなりとするは到底認むることを得ない」。（八八頁）

第四　一般的價値測度

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

茲に價値測度といつてもそれは金屬主義的に、或は貨物貨幣説的に解されたるものではなく、交換價値、價格等の一般的客觀的表示Wertausdruck, Commensdenuminator of Value と同意義に解されたる貨幣の一職能である。蓋し「今日の貨幣經濟組織の下に於ては、汎ゆる財の價格は貨幣によつて表示せられ」るものなるが故に、「之を名づくるに價値測度を以てするは固より當らず、然りとて價値の一般的若しくは客觀的表示となすことは、單なる技術的表示と區別せられざる」處があるが故に、博士はこの際、不滿ながら在來の用語例に從つて居られるのである。(「職能」九二頁、「本質」二一―二頁參照)

尙價値測度たる職能と交換手段たる職能とにつき先後の問題があるが、之に對して博士は「先後の序次を立つることを得ない」(「職能」九六頁)とせられる。

第五　價値貯藏及輸送手段

この二職能は貨幣が時間的及び場所的に價値を移轉することに屬するものである。之等の職能は均しく貨幣のなす作らきではあるがさまで重要なものではない。ヘルフエリツヒも亦之を附隨的職能として擧げてゐるに過ぎぬ。

第六　其他の職能(殊に繰延支拂の標準)

此の職能も前職能と同樣あまり重要なるものではなく、殊に上來擧げられたる諸職能と重復するの嫌ひがある。

以上諸種の職能を檢討したる末、高垣博士が到達せられる意見は次の如くである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

曰く「貨幣が斯かる諸種の職能を盡くす所以は、更にその根底に其等を生む本源の存するに因らねばならぬ。即ちそは流通經濟社會に於て、一般的經濟價値を保持するの職能にして、之れなくんば貨幣は上述するところの如何なる職能をも果たすことを得ず、汎ゆる職能はこの一點より放射する」と。（「職能」一〇八―九頁）

最後に吾人は博士の論斷に耳を傾けよう。

「經濟社會を全體としてその內に於ける貨幣の地位を考ふる場合にも、個々の職能を點檢してその本末を糺す場合にも、予は同一の論結に到達する。流通經濟社會に於て汎ゆる財は經濟價値を保持すれども、その內の或る財は何等かの關係に於て生活目的に役立つこと大に、從つて尊重せらるゝこと多くしてその價値漸次に一般的となり、即ち人に對する關係に於て、時間的場所的關係に於て一般的なる價値をそれ自らの內に保持し、如何なる特殊的經濟價値の保持者にも轉換可能の力を得來りて、斯くて貨幣は生成したものである。予の貨幣職能論は斯かる貨幣生成理論に裏付けられた。貨幣を以て經濟社會に於ける一般的經濟價値の保持者なりとする本質理論も、この職能理論と携行する。而して貨幣をば財と並べて價値判斷の對象たり得るとなし、その上に貨幣の價値に關する諸種の理論を築かんとする見解も、この職能論に脚地を置く。」（「職能」一〇九―一一〇頁）

八

以上顧みたるところにより吾人の知り得たる事柄は、諸學者の擧ぐる所謂貨幣の職能の根底には、之等職能を發揮せしめる所以のもの、高垣博士の言を以て云へば、一般的經濟價値を保持するといふ根原的なる職能がなけ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ればならぬといふことである。

博士の此の職能觀は、博士自身が明言せられる如く貨幣本質觀と相伴ふものである。試みに「貨幣の本質」中の代表的なる一句を摘記すれば次の如きものがある。曰く「貨幣を以て一の社會に於て一般的經濟價値を保持するものと稱するは、社會に於て人、時、處の關係に於て普遍的なる經濟價値を有ち、從て他の特殊なる經濟價値の保持者に轉換可能なる力をそれ自らに擔へることを意味するに外ならぬ。」（一四六頁）而して「貨幣なる語により蔽はるゝ內容が、時に從ひ廣狹の差を生ずるは當然にして、一般的に經濟價値を保持すと認めらるゝ限りに於て貨幣たり、一般性を失ふとき貨幣たるの本性をも失へるものと見ねばならぬ」と。（「本質」一四七—八頁）

元來高垣博士は普通の意味に於ける職能學說に贊同せられるものゝ如く（「職能」二頁）であるが故に、その論究の結論に於いて、一般的經濟價値の保持者を以つて貨幣の職能ともなし、又本質ともせられるのは論理の當然であるように思へる。然るに博士にあつては貨幣は一具體的なる存在であり、一般的經濟價値を保持するものでなければならぬ。（「職能」五九頁、「本質」一四六頁參照）若し然りとすれば博士に於いては貨幣は一方に於いて一般的經濟價値を擔ひ、他方に於いては何等か具體的存在たることを必要とする。換言すれば高垣博士が觀て以つて貨幣なりとせられるものは、一般的經濟價値の保持といふといふ職能と、具體的存在といふ態樣とこの二個の條件を具備するものでなければならぬ。而して若し人あつて博士に、この二個の條件の輕重につき問ふたとすれば、博士は恐らく兩個の條件に輕重なしと答へられるであらう、又然か答へられなければ博士日頃の主張は貫か

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

れない。隨つて若しその人が余に向つてその輕重如何を問ふたとすれば、余は職能學說の立場に止まりつゝ——余は近來この學說の中に止まることに多少の疑問を有しつゝあるが今はそれに觸れぬ——具體的存在により低き位地を與へる、否寧ろその存在の必要を認めぬ。

貨幣論上に於いてウオーカアが力強く道破した一句 Money is that money does は具體的存在の有無を離れて純粹にその職能を觀じてゐるものでなければならぬ。純粹に職能を觀じ之を本質となすに於いては爾餘の如何なる條件も之を必要としない。爾餘の何等かの條件が必要なりとするのは未だ職能學說に徹してゐないからである。

高垣博士が職能學說に立たれ、一般的經濟價値を保持することを以つて貨幣の職能とせられたるならば、貨幣の本質は矢張そのことゝ解せられなければならぬ、この際本質を何等かのものと解せらるゝ理由は少しもない。又若し本質をものと解せられるならば、その際には職能學說を遠く離れたものとなり、職能と本質とを均しく一般的經濟價値の保持といひ保持者といつても、それは偶然に一致したに過ぎないものであつて、兩者の必然的關係は存立し得ない、從つて博士の學問的構造物は茲に安定を保てゐるものとは云ひ得ないことゝなる。

博士は之を如何なる點に於いて支へんとせられるか、最後にこの點に關する博士の教を乞ひたい。

以上余は余が常に尊敬する博士の近著を紹介せんと試み、その結果に於いては徒らに獨斷的なる論理の羅列に終つたことを思ひ、又多くの個處に於いて長者に對するの禮を失したるなきやを懼れ深く陳謝する、幸に博士の寛恕を得、後輩指導の勞を吝まるゝことなくんば幸甚である。終に臨み吾學界のため博士の健康を衷心より祈る。